

# ほない歴史通信

第 71 号  
2014. 6. 1

体験を記録し、伝えることに注力

— 郷土史家石井喜志夫先生を偲ぶ —

四月九日、石井喜志夫先生が亡くなられました。享年八四歳。

二月下旬に、本誌「ほない歴史通信」第七〇号の編集作業をともに行い、いつものように町内の食堂で昼食をとりながらおしゃべりしただけに、私には石井先生の急逝が未だに信じられない心境にあります。また同時に、大子町史編さん事業とその事業終了後から始まった資料の整理・目録化、「ほない歴史通信」の編集・発行、そして町民向け各種歴史講座の開講等々、三〇余年の長い間にわたってさまざまな仕事を一緒にしてきたこともあり、大きな喪失感に捉えられているとも言っても過言ではありません。残された編集人はみな同じ思いであることから、郷土の歴史の掘り起こしに尽力された先生の死を悼み、本号を「石井先生追悼号」としたいと思います。先生の仕事ぶりやお人柄を偲ぶ一助にしたいだけ幸いです。

本誌の創刊号から最新の第七〇号までを振り返ってみますと、石井先生の執筆になる論考は六一編の多数に及ぶことがわかります。いずれにも興味深い記述が盛り込まれていますが、先生の論考の特徴は、何と言っても自らの体験を活写したシリーズものに集約できるように思います。しかも、記述内容に沿った自筆の挿し絵が毎回必ず添えられ、読者の理解を助けたのも先生だけの特

徴でした。「学校昔シリーズ」(第一〇号〜第二四号までの一〇回)、「昔の農家シリーズ」(第三八号〜第五三号までの一〇回、三回目から「昭和初め頃の農家」と改題)、「昭和初め頃の農家の仕事」(第五四号〜第五七号までの五回)、「昭和の初め頃の農家の行事」(第五九号〜第六五号までの六回)等がそれです。これらには昭和六年生まれの先生が体験し、見聞したことが丹念に記述されており、挿し絵の巧みさも相まって私たち読者は、昭和三十年頃からの高度経済成長の影響を受けて大きく変貌する以前の山間地域での暮らしぶりを脳裏に描き、鮮明に理解することが出来ます。

私の手元に、先生手づくりの小冊子『昭和の始め頃の農家の仕事』『昭和の初め頃の農家の暮らし』があります。本誌に連載した論考をまとめたものですが、冒頭の「初めに」で次のように述べておられます。「昔から引き継がれた農家の暮らしの知恵を、次の世代に少しでも分かって欲しいと思う。：昭和の初め頃の農業は人手が頼りだったから、子供も出来る事は手伝った。田植えや稲刈りなどの大きな仕事は、猫の手も借りたくらい忙しいから、子供も否応なく手伝わされた。中学生くらいになると、大人と一緒に同じように仕事をした。学校から帰っても遊んでいる暇はなかった。このシリーズは、：我々が書き残しておかないと、その頃の農家の仕事ぶりや子供達の手伝い、農家の楽しみなども分からなくなり、忘れ去られてしまうという懸念からまとめたものである」と。文字に残して後世に伝えたい、先生の執筆の意図は明らかです。また数年前、私に次のようにも話されました。「農家の仕事、農家の暮らし、農家の習慣。これら三部作で昭和の初め頃の農村、農家の様子をまとめたいと思っています」と。

三部作の完成を待たずに逝かれたことが残念でありませんが、歴史を掘り起こし、文字化し、後世に伝えることの重要性を痛感せざるを得ません。先生のご遺志を活かし、本誌に反映させることが残された者の努めである、と改めて思います。合掌。(齋藤)

天狗党西上詳報 (六) 中山道の宿場を行く

(天狗党の一行は信州を過ぎいよいよ中仙道へ入る。目的の京が近くなる。幕府の妨害も激しくなる一方だ。道も険しい山岳地帯を行く事になり、苦勞も増すが山中に暮らす人々の生活に驚いたりする。如何なる苦勞があつても規律正しく正義の戦を貫いて行く。)

諏訪宿の里人逃げ去り諸道具片付け在りしが、取り出して見れば飯は炊きてあり、お菜等迄在りしかば、またまた尋ねて酒肴を見つけて皆良き程に酒食して人馬の疲れを休めけり、夜の八時半時分捕りの陣太鼓を打ちければ、諏訪の城中大いに騒ぎけり、朝方に立出して右は塩尻、左へ入りて

平出宿に休む。此処に高遠の人数相固めけるが押し寄するを見て引き払い一人も居らず、故に暫く休みに大いに歓待しける。夫れより立ちて、二十一日夜 松嶋宿泊まり。

此処の役人大いに取り持ちける。夫れより立出して二十二日夜上穂宿に泊まり此処に交易致せし商人ありて恐怖して用金多分に献ず。宿中誠に取り持ち良し、然るに飯嶋宿役人出迎えに来たりて見舞す。翌日立ちて飯嶋宿に休み、ここに松本様の陣屋ありしが、皆宿割りして酒肴を調え歓待しぬ。夫れより立ちて二十三日夜 片桐宿に休み、此処より飯田の城下に近付きし処、城中より役人罷り出で間道案内しけるに依りて、通行の内領内の百姓且城下の町人共皆思い思いに炙魚など用意し且兵糧まで馳走に差し出し、馬食は大豆、麦等煮て持ちきたりぬ。此処を過ぎ二十四日夜駒場宿に泊まり、此処在方は家並み宜敷く、串柿の出来る処なり。翌日立ちて山本村に帰り、梨峠まで二里半余の峠を登り至つて險阻にして難所なり。峠頂に御嶽山の碑有り麓に下りて大田様の御関所有り、是を通過して二十五日夜 上清内寺村に泊まり、此処

は米穀一切なし、常に煙草を作りて是を切りて売り出し、或いは櫛引を業として米穀を買い入れ日営みとす。誠に片鄙(へんび)の土地なり。是より立ちて三里余峠を下り、雨降りにて難儀、此処も地面一切無し、常に櫛引を家業とす、昼食を調え中山道中に出て其の夜二十六日夜 馬籠宿、落合宿に泊まる。この辺里人等は世直し様とて大いに歓待しける、此処を立ちて 中津川宿休む。裏に遠山美濃之守様城有り。

此の宿にては三百人程義民ども屯集して攘夷の志願屢々(しばしば)の趣にて、御供に随いて上京せんとて沙汰有りけるが残し置きしに、宿よりは人馬共銘々兵糧の手当致し呉れぬ、誠に奇特の処なり。夫れより立出して

二十七日夜 大井宿に泊まりここに止宿して翌日出立して十三峠を越えて 細久手宿、大久手宿に休み、

この辺盛り砂して宿役人出て下座触れして世直し様とて大いに喜び、男女に至るまで手を合わせて礼拝す。それより行きて 二十八日夜 御嶽宿に泊まり、この辺は田面広く殊に宿並家造り等至つてよろしく人氣の宜敷き(よろしき)土地なり。

木曾川渡り 此川は中山道第一の早川にて川幅広し。此の向うに尾州殿の御人数固めありしが引き払いけり。太田宿に休む。尾州殿の御陣屋あり。応接して暫く当所に休み、宿役人出て宿割りして如何にも丁寧な歓待しける。此処を立ちて行きしに木曾川の辺に岩谷観音有り至つて景色よし、木曾第一なり。夫れより出て二十九日夜 鶴沼宿に泊まり、此の宿は盛り砂して宿役人上下着して出て下座触れす。其の丁寧なること言語に尽くし難し。是より十二丁南に当たりて犬山城有り、成瀬隼人之正様 尾州様の家老十一万石の城なり、良く見ゆる。是より立ちて左は郷渡川、右に入りて長良川を渡り、此処船少々故に馬上にて皆乗り越えけり、誠に宇治川の先陣の戦いも斯くや有らんと思われけり。(石井)

## 石井先生とオルガン

吉成英文

あれはたぶん平成十五年の夏のことだったと記憶している。当時中央公民館に勤めていた私は、石井先生に指定文化財候補物件の現地調査に同行をお願いしたことがある。調査が一段落したので、サア昼飯にしようと、大子おやき学校の門をくぐった。

学校の再編・統合により廃校になった元榎野地小学校を改修して開校したおやき学校は、夏休み期間中とあって平日にもかかわらず親子連れや、孫の同行相手だろうか祖父さん祖母さんなどが数多く訪れていた。昼飯に蕎麦を食べたが、少し物足りなかつたので焼きたてのおやきを追加注文した。

食べ終えた所で時計を見たら、未だ昼休みの時間帯だったので展示物やお土産売店等を一巡しようと校内を廻った。と、石井先生は展示物の古いオルガンの前で足を止めた。

学校の音楽の授業でピアノが使われるようになるオルガンの出番はなくなったのである。おそらく不要の物となってしまうのだろうか、廃棄されずに物置か倉庫の片隅にでも無造作に置かれていたのである。アチコチ塗料は剥げ落ち、ところどころにぶつけたような傷もある。

「なつかしいナア、これを弾いて子どもたちといっしょに歌を唄ったもんだ。このオルガン今でも鳴るのかナア」と感慨深げに呟いた。

「事務所へ行って、弾いてもいいかどうか聞いてきます」と、言いながら事務所を確認すると、

「どうぞ、ご自由にお使い下さい」とのことであった。

その旨を石井先生に伝えるとニコニコしながらオルガンの前に

立ち、軽く一礼してから蓋を開けて立ったまま、片足でペダルを踏みながら小学唱歌を弾き始めた。

この時に弾いた曲は、「むすんでひらいて」と「鳩ポッポ」それどころで音程がずれたり、音の出ない部分があった。

ところがである、弾いている最中にオルガンの回りに人だかりができ、弾き終るとパラパラと拍手が起った。ここで先生はオルガンの蓋を閉じて一礼し、ささやかな演奏会は終了した。

午後の補足調査が済むと、帰途の車中では取りとめのない会話になったが、二、三の不躰な質問をぶつけてみた。

「先生、オルガンを弾いたのは何年ぶりですか？」

「しばらく弾いていないな。たぶん何十年ぶりだと思うよ」

「何十年も前のものをよく弾きましたね」

「イヤア、オルガンの鍵盤に手をのせて曲目を想像すると勝手に指が動くんだよナア、言ってみれば教師のシユクメイみたいなもんだよ」

「先生、弾く前にオルガンに一礼して弾き始め、また終わったあとにも一礼しましたね。あれはオルガンに対して敬意を表したのですか？」

「よく見ているナア。今は見向きもされないあのオルガンでもかつては子どもたちに喜びと夢を与えたものなんだ。決して粗末には扱えないよナア」

「先生、今アチコチで閉校・廃校が相次いでいますよね。そこで不要になった楽器類の払い下げを受け、昔取った杵柄とばかりに仲間を集めて『へぼ楽団』か『がらくた楽団』でも結成しボランティア活動をしたらけっこう様になるんじゃないですか」

「アハハ」

そうこうしているうちに職場に帰着した。今となっては懐かしい思い出の一つである。

(常陸太田市在住)

## 石井喜志夫先生との思い出

(外池宇一郎)

石井先生今までありがとうございます。ご冥福をお祈りいたします。

古文書研究会一同より

古文書、歴史の話を経験の忘れる程いつも穏やかに優しく、楽しく、教えていただきました。私の話にも耳を傾け、話に花を咲かせてくださいました。突然のお別れに悲しさと残念な気持ちで一杯です。先生と古文書の仲間の暖かな雰囲気が好きでした。

(井野上幸子)

かつて保内出身で活躍した肥後博士、石井良一氏そして石井先生、郷土を愛し熱意のある研究を残した諸先輩を誇りに思います。石井先生には二回しか逢ってませんが、手書きの資料大事に持っています。研究心熱いまなざしが忘れられません。本当にありがとうございます。

(菊池正美)

先生の突然の訃報に言葉が見つかりません。最初に教えて戴いた解説は『書』と『出』の違いでした。江戸時代の貨幣価値や幕末の水戸藩について熱心に講義して下さい、時には旅行の話で盛り上がりました。今はただ淋しい気持ちでいっぱいです。合掌

(堀江幸子)

四月中旬に旅行から帰り、新聞を見て驚きました。早速、弔問に伺いました。短い期間でしたが、石井先生のご指導は古文書と云う堅苦しい感じがなく、広い知識の中で雑談を交えての講義で大変楽しいときを過ごす事が出来ました。ご冥福をお祈り申し上げます。

教室はいつも賑やかな笑い声で一杯でした。一人では直ぐ躓くも難無く疑問解決され博識ある解説をして頂き、どんどん古文書の世界に引き込まれて行きました。先生が書かれた海外旅行記は淡色合のスケッチが素晴らしく優しさ溢れる先生そのものでした。

(近津春美)

一字として読めなかった私が、少しずつ歴史に古文に興味をわき、辞書を手復活できたのは、先生のお蔭です。先生は、飽く迄自然体で安心出来るやさしさと溶け込み易い雰囲気をお持ちの方でした。お元気な復帰をお待ちしていましたが残念でなりません。

(松本紀子)

新聞の訃報欄に先生の名前を見つけた時、別の方ではと信じられませんでした。二ヶ月前の講座の時は、いつものように笑顔で話して居られたのに。入会して三年、全然進歩しない私ですが、毎月楽しみにしておりました。本当にお世話になりました。

(笠井敏子)

謹んで先生の御霊に弔句を捧げます。

先生をさらって行けり春吹雪

梅に笑み終の講義にならうとは

春雪や足跡残し逝き給ふ

先生によもつひらさか花満つる

かの世より見守り給へ若菜冷

合掌  
(菊池珠枝)

ぶっつけ本番の受講にも「共に学びましょう」と、懐の深いリードで人生の先輩の風格を感じておりました。が、もうあの温かいお人柄に接することの叶わないのは、寂しいかぎりです。謹んで弔句を捧げます。

斯く生きよ もう宜しかると 花の旅

(益子忠久)

石井先生、突然逝って仕舞われたのですね。私達皆驚き、悲しんで居ます。「古文書」は大変難しく、何度も止めようと思いましたが、先生の温かい人間性と先生の「どんな難しい文字でも、私達祖先が書いた文字です。やろうと思えば誰でも読めるようになります」というお言葉を忘れずに頑張ります。

(田代寛)

石井喜志夫先生の古文書研究会に入会し、十年以上になります。我が家にもずつと気になっていた読めない古文書がありました。大子駅が開通したころの根本正さんと祖父菊池信太郎の酒宴の文。研究会の教材として読み下すことが出来、宝物となりました。

(菊池信也)

ある日、古文書研究会の時だったと思います。

内容は今から二百年ほど前に、常陸国鹿嶋郡外浜へ漂着したウツロ船の話です。「船中 拾間四方 堅八間にて惣朱塗 船底は南蛮鐵と相見え申候 窓障子は残らず硝子にて候」と言う古文書です。

先生は、その時代の背景や人々の暮らしなど詳しく話をしてくれました。いつも難しいけれど興味深く聞かせて貰いました。

先生は、生涯人に教えるという役目を授かってきた方だと思います。



常陸国鹿嶋郡外浜へ漂着したウツロ船の古文書（講義教材）

沢山の事を学ばせてもらいました。思い出をありがとうございます。泉下でも楽しい趣味をお続け下さい。

(谷田部和子)



平成 25 年度 ふるさと歴史講座  
先生の昔話を交えながら楽しく講義  
していただきました。

## 大子町城館跡探訪 四

野内智一郎

### 四 相川館跡（大子町相川字落合）

栃木県との県境にほど近い、大子町相川字水落に相川館跡は所在する。国道四六一号から分かれた県道一五八号を進むと、山がちな地形の中にぼつぼつと水田や畑地が確認される。県道に対して西に大きくひらけた盆地の、小高い丘の上が相川館跡比定地である。全体的にこの地区は奥南西に向かって緩やかな傾斜で上がり、やがて山林となるが、その中央に相川館が存在したことになる。現在は比定地は畑地となっており、畑の一角には小さな塚状のマウンドに祠があり、おにしょ塚とされている。道の傍には、明治四十五年六月依上村『名所旧跡、天然記念物調査報告書控』を元に作成された「野内氏の相川館址とおにしょ塚」という案内看板が立っている。それによると、佐竹氏の国替え後、廢墟となつた野内氏の居館跡を人々が耕して田んぼとしたが、ここにあつた蛇塚から白蛇が出て田んぼを荒らしまわつたという。この蛇を殺したところ、あとからあとから白蛇が姿をみせ、人々はこれを畏れ田は荒廢した。それを憂えた村の次郎という者が白蛇をとらえて葬り、野内一族とともに祠を立てて野内家の霊を弔うと蛇は出なくなり、農地は良田となつたという。このような伝承の報告からも相川館の所在を確認することができる。館跡の東側には相川が流れ、西側は切岸状になっており、大きいところで5m前後の高低差がある。畑地の北西にある民家の北から西側は館周辺の遺構と思われる切岸が見られるが、それ以外に目立つた遺構は確認できない。これは、相川館跡が今まで紹介してきた城館跡とは違って、現在も人々の生活の一部である田畑や住居として日々使われているからに他ならない。

相川館は、佐竹氏の大子地方経営で重きをなした野内氏の居館跡とされている。野内氏は熊野より当地に渡り土着し、政治と結びついた信仰、さらには経済と結びついた金山経営の両面から依上保の現地管理者としての一面を持っていたと想定される。実際、早くから豊臣秀吉と誼を通じていた佐竹義宣は、文禄三年（一五九四）に、秀吉の命を受けた石田三成による佐竹領の檢地を受けたが、翌文禄四年（一五九五）には、義宣は五万五八〇〇石の所領を安堵されることになった。この文禄四年の知行割をみると、野内氏の長である野内大膳は金沢と田部田に二〇〇石ずつ計四〇〇石の知行をあてがわれている。これは大子地域では最大規模の知行であると共に、『新編常陸国誌』にあるように、金沢が金を産する地域であつたとするとかなり重要な地を任されていたことになる。また、相川館跡は、那珂川町とすぐに接しており、下野へ備える境界の守りとも想定されよう。

現在の相川館跡の遺構から踏査のみで当時の様子を復元するのは難しく、その範囲もはつきりとはしない。周辺の山上には相川要害（大子町相川字堀の内）と相川寄居城（大子町相川字寄居沢）という防御施設が確認されており、この地域に関係の深い野内氏などの緊急時の城館であつた可能性が高い。現在もこの地相川地区には野内姓の住民が暮らしており、野内氏と相川館の関係を偲ばせ（龍ヶ崎市在住）



相川館址の案内看板



畑地中央部に残る塚

## 根本正の水郡線鉄道建設に関する建議

昭和九年(一九三四)十二月に水郡線全線が開通しました。その建設に情熱をつくした衆議院議員根本正の「鉄道建設に関する建議書」について、当時の帝国議会議事録から紹介しましょう。

明治四十四年(一九一七)三月七日、第二十七回帝国議会で、根本は、「福島県下白河より分岐し茨城県水戸に接続する鉄道」について、「産業の発達交通の不備を補ふ為必要にして且奥羽線岩越線と水戸線との連絡上必要なりと認むるに依り政府は速に調査を遂げ相当の処置を採るべし」と建議します。

根本は、その理由を次のように述べています。

「本鉄道建設に関する案は福島県東白川郡より茨城県久慈郡及那珂郡を経まして水戸に達するところの七十哩の分岐線であります、此線路は生産的即ち農産物を運輸すること、又材木及鉱物を運搬するに付て最も必要なる鉄道であります、…此鉄道の通じます所に大子町と云ふ所があつて、其大子町には大なるところの煙草を生産し蒟蒻、紙其他材木と云ふものが非常なものであります、又は八溝山と云つて近頃金山が発見されて今採掘を實行されて居ります、其他大宮町と云ふ所は茶も出来、或は煙草の専売所もありまして、大に国家発展のために必要な所であります、…此所を経て水戸に参ります、水戸は昨年兵舎を置かれまして、此鉄道が出来ますならば軍事のためにも非常なる利益がある訳でありますから、此鉄道は国家のため一日も早く建設を望む次第で、審議の上本案を通過されんことを希望します」

明治四十五年二月二十七日、第二十八回帝国議会で「政府に於て速に本線の建設に着手せられむことを望む」と建議します。

その理由について次のように述べています。

「此線路は水戸より分岐して茨城県下の那珂郡瓜連、大宮、山方及

久慈郡の上下小川、袋田大子を貫通して福島県下東白川郡棚倉、石川郡石川を経て白河及郡山方面に到る凡そ七十哩にして最も必要な線路であります、此事に就ては昨年即ち二十七議会に於て提出しまして、政府も之に同意されてある建議であります、其後政府では昨年の九月十三日十四日頃より踏査をされて、又其後十月十日より殆ど五箇月間も掛つて測量も結了されたやうに聞及で居るとこの線路であります、…非常な煙草の生産地で、此線路中の茨城県ばかりでも二箇所大宮町、大子町、福島県では石川に煙草が非常に出来、…農産物は無論のこと、其他森林又鉱山も沢山でありまして、…交通不便なる為に非常な発達をすべき土地が発達出来ないで居ると云ふような状況になつて居るのであります、又此地は軍事上にも即ち水戸にも聯隊があり栃木にもあると、斯う云ふ風で、之に依りまして、軍事に關しても必要な線路であると云ふことが能く分つて居るのであります、此地方の物産で最も名高いのは煙草、蒟蒻其他薪炭、石材が沢山あります、…輸出に出来るものは殊に小麦の量と云ふものは近来非常に多くなつて、農産が益盛になつて居る、…実に此地方に鉄道が出来ましたならば、商工業の發展にも著しき便利を得ることになつて居りますからして、どうか諸君の御賛成を得て昨年の通り通過するやうに御願したいと思ふのです」

大正二年第三十四回帝国議会で、「本鉄道は茨城県水戸より福島県白河及郡山附近に達するところの鉄道の建議でありまして、第二十七議会及二十八議会に於きましても満場一致を以て通過した問題であります、爾來政府は四十四年に於きまして、此地方の測量も出来ましたけれども、まだ今日着手を致しませぬからして速に着手せられむことを望むのであります」と述べています。

根本は明治四十五年、鉄道建設への思いを

「鉄の道 嶮はしき山を通ひなば 開け行くらん水郡の里」

「福島の 熱き心のとも人と 鉄道院にかたる嬉しさ」

と詠んでいるのです。

(野内)

鹿行 鹿行 鹿行  
 鹿嶋支社 電話0299(82)1730 ファックス(83)3700  
 神田支局 電話0291(32)2501 ファックス(32)3478  
 行方支局 電話0299(80)6150 ファックス(80)6131  
 ◎身近な情報をお寄せください

## 歴史と文化伝え18年

### 大子の季刊紙70号

大子の歴史・文化を紹介した季刊紙「ほない歴史通信」が、音聲で70号を迎えた。電話とインターネットを通じて18年間、休みな差支えで発行してきた。ボラテラ心算で準備を進め、印刷から郵送の受け取り、町内各戸へ届くまで、重なること18年。郷土史を学ぶ身近な情報紙となっている。

18年間、全町の歴史・文化を伝える「ほない歴史通信」の70号が完成した。

楽しく読める 心掛け

大子の歴史・文化を伝える「ほない歴史通信」の70号が完成した。電話とインターネットを通じて18年間、休みな差支えで発行してきた。ボラテラ心算で準備を進め、印刷から郵送の受け取り、町内各戸へ届くまで、重なること18年。郷土史を学ぶ身近な情報紙となっている。

平成 26年 5月 23日 発行 茨城新聞



平成 25 年度ふるさと歴史講座(現地巡り)車内にて冗談を交えながら講評をいただいた時のようす。

(家田)

編集 大子遊史の会  
 編集人 齋藤 典生(茨城大学教育学部特任教授)  
 野内 正美(茨城県立歴史館資料調査員)  
 齋藤 仁司(大子町教育委員会)  
 家田 望(大子町教育委員会)  
 発行 大子町教育委員会  
 久慈郡大子町大字池田二六六九番地  
 大子町立中央公民館  
 ☎ 0295(72)1148

ほない歴史通信が茨城新聞に載りました!

このほない歴史通信が前号で七十号を迎えたという内容が平成二十六年五月二十三日金曜日の茨城新聞に掲載されました。記事の内容は創刊のきっかけや現在に至るまでの道のりについて書かれています。

十八年間発行を続けた成果が着々と実を結んでいることに大きな喜びと感動を覚えます。長年の編集人の努力と支えてくださった寄稿者、読者の皆さんの支えに感謝申し上げます。専門的な内容ばかりでなく、誰もが親しみやすく、楽しく読めるような季刊誌を目指します。そして、郷土の歴史を語り継ぎ、郷土を愛する人々を育てるという役割を担っていただけるよう、今後活動が続けていきたいと思います。

編集後記

今回は、石井喜志夫先生の追悼号というテーマで編集を行いました。二ページに掲載されている「天狗党西上詳報(六) 中山道の宿場を行く」は石井先生の遺稿です。実は前回七十号の編集の時に、既に先生は事務局に次の原稿も出来ているからと原稿を預けてくださったのでした。誠実で、堅実な先生らしいエピソードです。

一年という短い間でしたが、一緒に活動する中で先生から学んだことは沢山あります。石井先生の意思と情熱を今後は我々が引き継いでいきたいと思います。

(家田)



ふるさと「故郷の川」石井喜志夫先生の作品